



かつて奈良田では、建物を建てる際の地固めに「どんづき」と呼ばれる作業を行っていた。写真「どんづき」と呼ばれる作業を行っていた。写真は2009年、映像記録のためどんづきが再現されたときの1枚。現在では、どんづきの作業で歌われていた「どんづき唄」を、白樺会の発案により餅つきの時に歌って継承している。

日本上流文化圏研究所発刊誌「やまだらけ」がここに100号を迎えました。感無量です。



「やまだらけ」100号を迎えて

私たちの町、早川町は、今から30年前平成6年に長期の町づくりの基本構想に、第四次長期計画「日本上流文化圏構想」を掲げスタートを切りました。その構想の中で平成8年に上流文化圏研究所を位置づけました。研究所は町づくりの構想実現に向かって、今日まで広く頑張ってくれてきています。

その事業の一つとして「やまだらけ」の発刊は、平成15年（2003年）第1号から、ここに100号を迎えました。その内容は、自然から始まり、早川町の歴史や文化、人々の紹介、町づくり等多岐にわたる、南アルプスの源流にある私たちの町、上流圏のすべてにわたっての紹介が毎回取り上げられてきました。そして、その内容は、私たちが手にして、私たちの町が自慢できる誇れる内容に尽きるといってもいい豊富なものばかりでした。

町民にはもちろんのこと、また広く町外に向かっても多く、愛読者に親しまれ、早川町に関心を寄せて頂いた役割も担い続けていくれています。早川町が誇れる町の機関誌です。

2003年



1号



2023年



100号

私たちが暮らす上流圏の里、早川町は今、人口減少と過疎化の中にあります。その中でこれから先の町づくりはどのような方向を目指したらいいかということが文化圏構想の大きな目標であり、それに向かっての町づくりが最大の課題で、今それに挑戦し続けているところなのです。

上流文化圏構想は、世界中が激動期に入っている今、私たちは100年先の地域ビジョンを目指して、瞬間ではなく、時間と時代軸で地域の真の豊かな暮らし、人々の真の豊かな生き方を求めて、この大自然の地、早川を守り続け、生きていこうというものです。この町づくり構想のスタート以来、機関誌「やまだらけ」は、町とともに歩み、そして、町とともに汗をかき続けてきてくれています。

これからも早川町は永遠に不滅です。ここで生きていく人々がより豊かで、より生き生きと誇りを持って暮らし続けられる町を目指して努力していきます。機関誌「やまだらけ」がこれからも町の顔として、すべての町民を勇気づけ、町の誇りとし、町とともに永遠に歩み続けてくれることを期待いたします。

山を覗けば宝の山



発行元 / NPO 法人日本上流文化圏研究所
住所 / 山梨県南巨摩郡早川町薬袋 430
T: 0556-45-2160 F: 0556-45-2268
www.joryuken.net

平成15年（2003年）9月に、やまだらけが発行されてから100号を迎えました。やまだらけを通して、地元の歴史や文化を町民のみならず全国の方々に知ってもらい、重要な役割を果たしてきました。100号に達するまでに、町民のみならず、多くの方々に協力いただいたことを心から感謝いたします。これからも、地域の魅力、源泉を掘り起こして紹介するやまだらけの考えを大事にしながら発行していきたいと思っています。

人が集まり生まれる力

HAYAKAWA-CHO



早川町の情報誌として、2003年9月に創刊された『やまだらけ』が、今回ついに100号の節目を迎えました。この記念すべき号では、町内のグループや集まりに着目したいと思います。

私は早川町で暮らすようになって、町内にさまざまな集まりがあることや、そのつながりの濃さに驚きました。それまでは都市で暮らしていて、地域とのつながりはほとんど意識することのない生活だったからです。しかし、町の中で区などの集まりに関わるようになると、地域の一員だという意識が芽生えるようになり、自分の居場所ができたようでうれしく感じたのを覚えています。そんなことから町の中の人々のつながりというのは、早川町を考えるにあたって、一つ重要なテーマではないかと思うのです。

早川町内には多くの集まりがありますが、今回は5つの集まりに着目して、どのような影響を町の人々に与えているのか考えていきます。

クシダユリ



町民全員が構成員「区」

（関連：やまだらけ81号）

「区」とは（関連：やまだらけ81号）とはいわば集落ごとの自治会のことです、この単位で回覧板が回されたり、定期的な地域清掃やお祭り、年度末の総会などが行われたりします。町民ならどこかしらの区の構成員であるはずだ。

区をつなぐは、生活の維持に直結するものともいえる。前年度の草塩区長を務め、町で生まれ育った望月弘一さんにこの区の活動の様子が伺うと、「昔は区の無尽の飲み会で、あの道路を直そう、次は何をしようといった集落の話題が自然とあがって、煮詰まっていた」と話す。道路やお宮の修理など、全て区ごとに自力で対応していたという。

さらに弘一さんはこのように教えてくれた。「今は多くが町の管理になったが、地域内の雑草を除去したり、水路がつまりなど、定期的に掃除したりなど、常日頃から自主的に集落内に目を光らせてくれている人がいる。また、水道は区の水

道組合が管理しているが、山奥の水源までわざわざ行き来して水を使えるよう維持に努めてくれている人もいます。」

平穏無事に暮らせるのは、昔からの流れで「自分たちで集落をなんとかしよう」という意識のある方々のおかげだと気づかされた。同時に区のことを年長者に頼りきりになっていく自身の態度も認識し、自分にできることは何かを考えていかなければと思う。

暮らしを守る「消防団」

消防団は町民によるボランティアで組織されていて、災害時にいち早く対応する他、日頃の消防点検や訓練なども行っている。山奥の早川町は消防署からの人員の到着は早くないため、火災や災害の際に迅速に対応してくれる消防団は、町の安全を守る必要不可欠な存在だ。団員数が少ない中、一人一人ががんばって活動し、私たちの生活を支えてくれていてとてもありがたい。

消防団員のつながりの様子を団長の深澤渡さんに伺った。30年ほど昔は、飲み会が頻繁にあり、年齢の違う団員同士も親しくなりやすかったという。しかし今は飲み会は減り、年配者と若者との気持ちの距離は広

がるばかり。また、町外で仕事をする人が増えたため、緊急の連絡があってもすぐに駆けつけられない人が増えている。

「団員同士のつながりは昔と比べてそこまで強くない気がして、ちょっと寂しいですね。昔は、防災無線で知らされるよりも前に、煙が上がれば自主的に出動していたし、普段から町の中にいる若者も多かった。今は、すぐにかかけられる数少ない団員が特に強く使命感を持っていることで、消防団としての対応ができているんだと思います。」渡さんはこう話す。

都市と比べて人とのつながりが強い早川町でも、時代とともにライフスタイルや環境が変わりコミュニケーションは浅くなりやすくなっている。これが進むと、町のことにどんな無関心になって地域に関わらない人が増えていくのではないか。そうなると町の暮らしを維持することも難しくなる。地域の人のおしゃべりで知ることがができる町の状況情報は多い。意識して町内の人とのつながりを築くことが必要だろう。

③ + ④ 消防団の出初式。

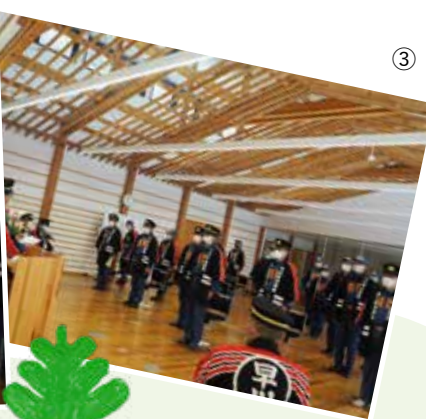


写真 ①～④ 撮影：クシダユリ



時代とともに間口を広げた「かのし会」

（関連：やまだらけ21号）

一方、人が増え盛り上がりつつあるグループもある。その一つが狩猟シーズンにグループ狩をする「かのし会」（関連：やまだらけ21号）だ。獲物の前以外では銃から弾を抜くよう徹底したり、山の神への安全祈願やお供えを欠かさずしたりなど、この会の活動は団体での狩猟の規律やマナー、自然との接し方も教え伝える機会になっている。



⑥



⑤



⑧



⑦

⑤～⑦ かのし会の狩の様子

⑧ かのし会の狩後の懇親会の様子

写真提供：かのし会

長年かのし会で活動する深澤肇さんに伺ったところ、30年ほど前に発足した当初は、気の合う同年代のみで活動していたとのこと。年月が経つにつれて高齢化でメンバーは減少し、新たに参加したいという若い移住者が現れるようになった。

「それまでは見知った仲間だけでやっていたが、思い切って新しい人を迎え入れるようになった。現在では、猟に興味を持つ移住者や若者が町内で増えつつある。グループ狩という文化を残せるし、猟や懇親会を通して親しい仲間ができるのは何よりうれしいこと。」と肇さんは語る。

時代とともに柔軟に間口を広げてきたことで、かのし会は消滅を避け、脈々と続いてきた町の狩猟文化を若い世代へとつないでいる。かのし会は、年齢の差や、地元民と移住者間のギャップを超える貴重な交流の場ともいえるだろう。

伝統がつなが

「白樺会と三味線の会」

（関連：やまだらけ82号と94号）

早川町の最奥・奈良田には、古くから伝わる民謡の保存と伝承を目的とした「白樺会」がある。60年以上続くこの会は、基本的に奈良田の住民全員が参加していて、数年前に

楽しいから自然とつながる「大島イルミネーションの集まり」

県道37号線沿い、森林組合前二帯の大島では、毎年冬になると鮮やかなイルミネーションが夜の町を彩る。イルミネーションは、今年で7年目。遠藤貴美子さんが事業所を飾り付けたのをきっかけに、もっと増やそうという声が上がリ、年々灯りが増え現在の規模にまでなった。毎年クリスマス前に開かれる「イルミネーション鑑賞会」では、大島の伝統野菜・島根芋などを入れた貴美子さんお手製の豚汁や、お菓子のプレゼントなどがふるまわれ、町内外から人が集まる賑やかなイベントになっている。

年を追うごとにイルミネーションに関わる人は増え、大島以外の町民や身延、南アルプスなど町外の人も関わるように。みんなが生き生きと活動をし、人口減少の影を微塵も感じさせない活気がこの集まりにはある。原動力は何なのか。「好きなのよね、こういったイベントが。冬で寒いけどみんなで集まって話をして関わるのが良いなと思って。節目の10年目には花火を上げたいです。」貴美子さんはこう語る。「楽しい」という思いは、人を強く惹きつける力があるのだろう。

⑨



⑨～⑫ 町内の白樺会のメンバーと町外にいるメンバーで練習も兼ねた交流会。

写真提供：白樺会



⑩



⑪



⑫



82号

は夏の盆踊り（関連：やまだらけ94号）も復活し恒例行事となってきた。民謡を歌える貴重な年配者の多くは町外で暮らしているが、盆踊りのときには奈良田に招いて参加してもらう。白樺会は町外に出てしまった人と奈良田に暮らす人との縁もつないでいる。

白樺会の立ち上げメンバーの一人である深沢貴さんは、月2回ほど自宅で三味線を教えている。きっかけは、数年前に奈良田へ引っ越し、ここでの結婚式を控えた若い新婦が、披露宴で民謡を演奏したいといっ

大島イルミの人のつながりはとても柔軟で強固だ。

⑮

おわりに

早川町は地域の暮らしや伝統、文化などを守っていくことに対して「自分たちでなんとかしないと」という思いを持っている人が、都市に比べてはるかに多いように感じる。その思いが地域の人同士をつなげ、町のパワーの源になっているのではないだろうか。

⑮ 大島のイルミネーション鑑賞会での音楽ライブの様子

⑯ 大島のイルミネーションの鑑賞会の様子

撮影：クシダユリ



⑯



⑮

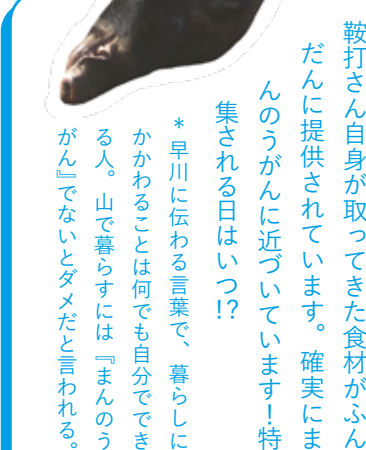


⑮



大きなイノシシを仕留めた！

初期には、サポーターズクラブ向けのオリジナルツアーを企画し、『やまだらけ』で募集を行っていました。そういったツアーの参加者の中には、常連になって早川に通ってくれた人もいました。また、何かのきっかけで早川にやってきた学生たちを『やまだらけ』編集部に誘い、記事の取材・執筆を担ってもらったという仕組みも定着。これによって、学生たちは、時には社会人になってからも早川に通い続けてくれています。こういったつながりは、『やまだらけ』の成果だったと思います。



「作りの手が変わることで、少しずつテイストが変わっていくのは当然だと思っけれど、「地域の魅力とその源泉を掘り起こし紹介する」という根本の部分は守ってほしい。俺を特集するまで『やまだらけ』の発行を続けてもらいたいなあ笑」

「やまだらけ」50号の編集部員による座談会の席で、今後の『やまだらけ』について一言求められ、「いずれ自分が『まんのうがん』として特集してもらえるように頑張ります！」と発言していた鞍打さん。当時は、冗談とも本気ともつかず、一同に笑いを巻き起こしたのですが、鞍打さんはその後、2017年に独立し、2018年に古民家一棟貸しの宿・月夜見山荘と、手打ち蕎麦と山の食の店・おすくにを開業。古民家の改修は、友人たちの手を借りながら自力で行い、宿や店では、鞍打さん自身が取ってきた食材がふんだんに提供されています。確実にまんのうがんに近づいています！特集される日はいつ！

* 早川に伝わる言葉で、暮らしにかかわることは何でも自分でできる人。山で暮らすには『まんのうがん』でないとダメだと言われる。

『やまだらけ』が作ったつながり

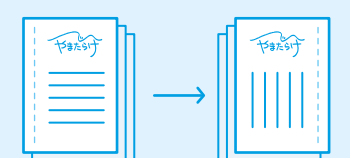
多くありました。特に、山に暮らす知恵や技の話など、早川でしか聞けない話は非常に面白く、それをもっと多くの人に知ってもらいたい、という思いが、『やまだらけ』の根底にはあります。心の底から「面白い！」と思って取材しているところに、『やまだらけ』の面白さの源泉があるのだと思います。

インタビューを終えて



【製作裏話その1】ロゴの秘密

『やまだらけ』のロゴ(題字)は、初代編集長の鞍打さんが書いたものです！



【製作裏話その2】冊子の変化

創刊当初は、横書き・左綴じでしたが、5号からは縦書き・右綴じになりました。また、ページ数も4ページから増えてきました。



一言コラム

バックナンバー



『やまだらけ』のバックナンバーは、インターネット上で公開しています。
<https://fm-hayakawa.com/fm/yamadarake>
もしくはQRコードからご覧ください！



初代編集長と振り返る『やまだらけ』

祝・100号！



鞍打大輔さん

『やまだらけ』の発案者にして初代編集長、80号までは誌面のデザイン・レイアウトも手がけていた鞍打大輔(くらうちだいすけ)さん。2017年までは、発行元であるNPO法人日本上流文化圏研究所(以下、上流研)の事務局長として、早川のまちづくりを担ってきた人物でもあります。刊行開始から20年、ついに100号を迎える『やまだらけ』について、改めて鞍打さんに振り返ってもらいました。

取材 / 文：柴田彩子 写真提供：鞍打大輔さん

創刊当時

主に町外に住み、有料の会員となることで早川町とそのまちづくりを応援する「早川サポーターズクラブ」。その会員向け情報誌として『やまだらけ』が誕生したのが、2003年9月のこと。

創刊当時は、全くの手探り状態。読者から叱咤激励も受ける中、試行錯誤を続け、1年くらいして、ようやく作り方が見えてきた気がします。

読者層

創刊当時は、町外の人に、『やまだらけ』を通じて早川という地域に興味を持ってもらい、まちづくりに関わってもらいたい、という狙いがありました。そのため毎回の特集は、通り一遍ではない、地域を深掘りするようなテーマ。そのうち、町内の観光施設で配布したり、NPOの会員に配布したり……と、町民の目に触れる機会が増えてくると、町民からもそういったテーマを「面白い！」と言ってもらえるようになりました。地元の歴史や文化を町民自身が知るためのツールとして

面白さの原点

『やまだらけ』発行に関わっていた町外出身の上流研のスタッフや、関係する学生・OBOGたちは、「2000人のホームページ」(現・「早川マイインド」)の取材など、多くの町民から直接話を聞く機会

愛犬を連れて山へ



早川町特産品
早川町観光PR
早川町の魅力を東京で発信します！
～お気軽にお問い合わせください～
ANNIVERSARY CONCERT
アニバーサリーコンサート
TEL: 03-5823-4043

全館源泉掛け流しの宿
慶雲館
TEL 0556-48-2611
FAX 0556-48-2611
http://www.kelunkan.co.jp

日新火災海上保険 代理店
日新火災
幡野保険事務所
〒409-3306
山梨県南巨摩郡身延町夜子沢4020
TEL 090-8014-1337
FAX 0556-42-3073

生命保険、損害保険のことなら
株式会社 さいとうエージェンシー
tel.055-280-3360 fax.055-280-3361
自動車販売、オートリース、レンタカーのことなら
有限会社 S・T・E・P
tel.055-280-3350
〒400-0422 山梨県南アルプス市駒沢 1356-1

地域発展のお手伝い！地域の暮らしを守る！
早邦建設株式会社
【本社】〒409-2732 山梨県南巨摩郡早川町高住 645-27
TEL.0556-45-3000 FAX.0556-45-2288
【生コンクリートブランド】TEL.0556-45-2700
http://www.sohco3000.com/

南アルプス街道の交通安全と
清流早川の自然を守ることを永遠のテーマに
地域社会の発展に貢献する事を目標します。
早川砂利協同組合
山梨県南巨摩郡早川町小幡 26
電話 0556-45-2450

早川町で感動体験を・・・
南アルプス生態色
光源の里温泉 ヘルシー美里
南アルプス邑野鳥公園
ご予約・お問い合わせ
TEL/0556-48-2621
http://www.hayakawa-eco.com/hmisato/

地味にスゴい！
農業をささえる生きもの図鑑
谷本雄治 著 イシダコウマンがイラスト
定価(本体5,200円+税)/29×23cm/150頁
ISBN978-4-338-08173-3
田畑で活躍するアイガモ・ミツバチなど56の生物を紹介。小5社会「食料生産」・理科「受粉」の副読本に！SDGsの学習にも。
〒162-0066 東京都新宿区市谷台町4-15
小峰書店 TEL 03-3357-3521 FAX 03-3357-1027